

新年の御挨拶

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長

おお いし ひさ かず
大石 久和



あけましておめでとうございます。新しい年が、会員の皆様にとって幸多き年になりますよう心より祈念申し上げます。また、ご家族のご清栄をあわせてお祈り申し上げます。

昨年は、コロナという疫病との戦いに終始した大変な年でした。また、残念なことに、この国が国民への現金給付や患者数の統計などで混乱してしまい、社会の各方面でネットワークとデジタルの環境の整備が他の先進国から、相当に劣後していることも明らかになってしまいました。

1998年には9,060床もあった感染症病床を、直近では2,000床程度に減少させるなど、医療環境の劣悪化を進めてきた結果、危うく医療崩壊を起こしそうにもなりました。

年中行事になったかのような災害についても、無事ではありませんでした。秋の台風こそ逃れたものの、梅雨期の豪雨で球磨川が氾濫するなどの大災害もありました。脱ダムなどとリアリズムが欠けた妄想をもてあそんできたツケがあらわになってしまいました。

遅きに失した観はまぬがれませんが、それでも川辺川ダムが動き始めることになったのは、将来世代への責任を果たす決意表明となりました。

コロナ感染症対策においても、災害対策についても、政府の役割がきわめて大きいことが再認識されました。

インフラが人の命を救い、効率的で競争力ある国土にしていくための不可欠な手段であり、政府の責任が大きいとの認識が広まっていくことを期待したいものです。

幸いなことに、国土強靱化施策が5カ年計画として動き始めることになりました。われわれ全建会員は、この推進役の中心として活躍していかなければなりません。新年にその決意を新たにして参りましょう。

そのためには、建設技術を幅広く獲得していくことに加え、建設技術者自身が情報通信やDXについての学習を深めていくことが必要になってきます。

全日本建設技術協会は、その学習の場の提供と、会員が相互に研鑽し合う機会を提供できるよう準備を整えて参ります。

昨年には大きな補正予算を組んで大幅な国債発行に踏み切ったにもかかわらず、財政破綻の兆しも見えません。財政再建至上主義は誤りだったのです。間違った財政認識を払拭して、現世代と将来世代が安全で生き生き暮らせる環境の整備に、会員みんなで努力して参りましょう。